

## スズキドクグモの観察記

小 松 敏 宏

長野縣諏訪郡北山村湯川區

〔昭和十二年四月二十五日受領〕

Komatsu, T. - Note on my observation of a  
Japanese spider, *Lycosa suzuki* K. Kishida.

*Lycosa* 屬は多數の種を擁し、これを更に數個の屬に分ける學者もある。夫の習性は古くより報告せられ、小生の承知せる範圍にても既に Staveley 氏 (1866) に依つて報告せられてゐる。

本邦に於ても大野豊氏 (1913) に依つて *Lycosa* sp. の主として育兒法に就いての名文あり、近くは岸田久吉先生 (1933) のウヅキドクグモ *Lycosa T-insignita* Boesenberg et Strand の簡にして要を得た記載がある。只今 *Lycosa* 屬としては求婚方法、交尾體型、産卵、その保護、住居、外敵等々何れも大約判明してゐる。

表題の *Lycosa suzuki* K. Kishida は 1934 年以來當北山村に於て稀に採集するを得てゐたが、1936 年には成♀を飼育する機會を得て、先人の觀察に附加すべき、興味ある習性の一二を承知した。該種に就いては全く習性に關する記録も無いのであるから、これを記録してみたいと思ふ。尙始に當り、貴重な文獻の御惠投を忝ふした岸田久吉先生に深甚なる謝意を捧げます。又 8 月上旬筆者の留守中飼育觀察を引受けた當時尋五學年生徒の勞を附記する。

### 観 察 記 録

1936 年の 5 月 23 日に巨大なスズキドクグモの ♀ を當村の學童が採集した。ウヅキドクグモ等に較べると驚く程大きな淡綠色の卵囊を蛛疣につけてゐた。採集地は南向の傾斜した芝原で、其所には日本特産で著名なボロアミグモ *Boroamia pschroides* K. Kishida の螺旋狀の鑑網が草間に拵らへられ、その下には眞黒な ♀ と、それを訪問した黒地に銀白の鮮やかな横縞を織出した ♂ が居り所々の小藪にはニシナグモ *Nishina genelosa* K. Kishida も跳躍してゐやうといふ豪勢さであつた。

その♀を卵囊と一緒に大切に持歸つて大型の化學實驗用水槽の底に黒土を3cmの厚さに敷き、ハترون紙を折つたものを隠家として與へ、更にシャーレー1個を自然環境ならば差當り石に見立てゝ入れ、其の内に放して置いた。

スマキドクグモは其の内で執拗な逃亡を企てる事もなく生活してゐた。たゞ直射日光の嫌惡は顯著で、窓の外に出して暫く置くとすつかり意氣銷沈して仕舞ふ。然し餌を與へるか、特に乾き切つたその土に水差から水を注いでやると駆寄つて來て潤つた土塊に口を宛てゝ吸飲する。今迄萎びてゐた腹部が丸々と張切るまでに脹み、元氣が恢復する事は注目に値した、又實際愛らしくもあつた。

棒の先で突くと向き直つて來て第一歩脚を高く上げ、頭胸部をぐつとそらせ觸鬚の上部の朱色部と鮮黄色に圍まれた黒い毒々しい腹部下面を表して威嚇し棒へ飛掛つて咬みつく。南米には棒を傳つて手元へ來るドクグモもゐるとの事であるが(Hudson 1892)内地としては恐らく最も勇敢であらふ。觸鬚の膝脛兩節の麗しい朱色部、虎の斑紋を連想させる様な腹部下面は警戒色として習性學上意味を見出す事が出来る。(蜘蛛の防禦姿勢に就いては後文参照) 卵囊をかまふと腹部下面へ抱え、口器で啣へて逃げて仕舞ふ。

6月17日には夜間硝子壁とハترون紙の間に絲を張り渡し、其の下に翌朝はうすくまつてゐたが、18日には既にそれを捨てゝ出歩るいてゐた。

7月13日には卵囊を終ひに捨てゝしまつた。始は淡緑青色の美事なものであつたが、今では雨に打たれ、日に照りつけられ、埃まみれになつてゐる。それを取上げて檢すると卵は硬くなつてゐり、199粒を算へた。孵化に至らなかつた原因は不明であつた。

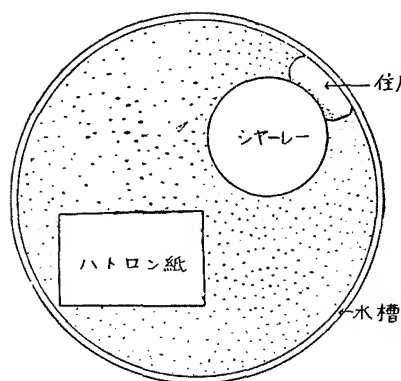
其後蜘蛛は益々元氣で與へるエンマコホロギ、クサグモ、ウヅキドクグモ等を飽食して餘分のものは咬殺して捨てゝしまつてゐた。棒でつゝくと前よりも一層恐ろしい様子をする。順次に頭胸部をそらせて行つて、最後には全くの仰向に地面に横り、大顎をひらき、歩脚を擴げ、棒を近づけると飛びかゝつて咬付き、さつと逃げる。

7月22日に數匹のウヅキドクグモを與へ、23日に早朝調べると蜘蛛はシャーレーと水槽の硝子壁との間に住居を作つてゐた。

シャーレーと硝子壁との間は約3cm距つてゐたが、その間の土を器底の見えるまで掘下げ、硝子壁とシャーレーの上縁との間に粗い幕を拵へ、幕の上に細く碎いた土塊が置いてあつた。蜘蛛は近付くと、作業を止めて下に隠れてしまつた。そして其の日の午後から

は住居を捨てゝ徘徊してゐた。

7月25日の早朝見ると其の住居に入つて、補強工作に餘念も無いところで、工事は殆んど終了に近いと思はれた。巢の形は中程のくびれぬ繭に似て横徑3cm 長徑8cmで長徑の一端には1cm程の直徑の穴が開かれ、時々蜘蛛の歩脚が隠見してゐた。布の厚さはクサグモ *Agelena limbata* Thorell の程度にまでなつてをり上部は新しく濡れた土が置かれ、内部はまづ窺ふ事は出来ない。一寸見たところでは巢があるとは信ぜられない。硝子壁の部へも土を塗り込めた



第 一 圖

*L. suzuki* を飼育した容器を上方より見たもの

布が張られて内の様子は非常に見憎い、が蜘蛛が内部で今尚絲を紡いでゐる事は解つた。(第一圖参照) 午前10時頃に數匹のクサグモを採つて來て容器内に放して見た。クサグモは逃げやうと急つて其の住居の上を通り越し、或ひはその穴に入らふとした。ス、キドクグモは後者の場合は咬みついて追ひ拂つてゐたが暫くの後にはその穴を絲で閉ぢて外との關係を斷つた。

26日、27日、28日までは内部の蜘蛛は異状はない様であつたが29日に注視すると既に卵囊を作つて腹部にくつゝけてゐた。住居の上面は2所ばかり小さな穴が開けられてゐた。穴の形は底邊8mm 高さ2—3mm程の三角形であつた。7月31日にはその住居の1端に約1cmの直徑の穴が開けられ、續いて8月3日には他の端へも口が開いた。蜘蛛は與へられた昆蟲も捕食せず、晝間は外出するを見なかつた。其後次第に徘徊性を表して時々は出歩るき、食事を攝り、又巢内に隠れる等色々の場合が見られた。

8月20日 この日に再び巢内に入り、出入口は閉ぢなかつたが様子は不明であつた。4日過ぎて8月24日に巢から出た♀をみると腹部に仔蜘蛛が群つてなり、卵嚢は住居の傍に捨てられてゐた。

8月26日 この日まで20日以来餌も水も與へなかつたが一匹の *コクサグモ* の♀を與へると親は驚して吸飯した。仔蜘蛛は勿論微動だにしなかつた。ところが續いて乾燥し切つてゐる容器に水を注ぐと親は獲物を捨てゝ其所へ駆付け、水を飲みはじめた。と仔も急に活動し始め、五六匹の仔蜘蛛は立上り親の歩脚等を傳つて土面に下り立ち、熱心に水を飲み始めた。親は其の間静止して同様水を飲んでゐた。仔蜘蛛は2〜3分間熱心に飲んでゐたが又一匹一匹と元の位置へ戻つて行つた。(因に此の觀察は數名の兒童との觀察であつた。又單なる逸話にとゞまらないであらう事を信じてゐる)

8月29日頃から2〜3匹づつ親の脊を離れて仔が容器内を歩み始めた。9月1日には大半は親から離れてゐた。午後になつて快晴の屋外を眺めた時、浮圖仔蜘蛛を自由にせよと思ひ立つた。そこで水槽を南向の窓に出して呼氣で仔を外に吹出してやつた。そして其儘にして1時間程経つて再び容器を屋内に入れやうと行つて見ると、親も仔も直射日光に照りつけられて死んでゐた。硝子は手の觸れられぬ程熱かつた。筆者の不注目に觀察はこんな結末を告げるに至つたのである。

## 要 約 と 考 察

1. 筆者は1936年5月23日から9月1日に至る102日間 *スズキ ドクグモ* *Lycosa suzuki* K. Kishida の♀を飼育した。

2. *suzuki* の觸鬚上面の朱色部と腹面の鮮やかな黒と黄との斑紋は警戒色なる事を確めた。

3. 飼育中の♀は7月28日に第二回目の産卵をなし、8月23日頃に仔蜘蛛は親の背に移つた。其間約27日。

4. 卵嚢製作の爲に見事な長卵形の住居を製作した。6月17日の住居製作と8月20日〜24日の行動より推して仔蜘蛛の卵嚢を辭し、母蜘蛛の背に移る爲にも住居を作る能力がある様に思はれた。

5. 仔蜘蛛は、多くの觀察者の異口同音に報ずる如く、親の食事には参加しなかつた。然し水を飲む爲には親の背を離れ、水を飲み終つて再び歸り來たのを確認した。